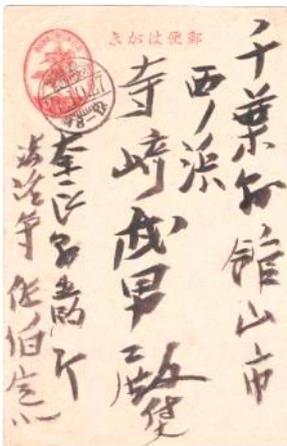


## 法隆寺の壁画 / 管主・佐伯定胤上人との交流

寺崎武男は、生涯を通じて西洋の伝統的な壁画と法隆寺の壁画研究をライフワークとし、東西文化の融合を図り、100年後に褪せない壁画制作を志した。

東京美術学校時代より法隆寺の佐伯定胤管主を師と仰ぎ、金堂壁画と唯識論を学び、得度し、壁画研究と交流を続けてきたという。法隆寺出火前の大修理に難渋している様子がうかがえる管主のハガキも見つかった。

寺崎は、大正期から法隆寺の火災を懸念し、防火設備の不備に警鐘を鳴らす論文を書いている。しかし予見どおり30年後の1949(昭和24)年1月26日早朝、法隆寺金堂から出火し壁画の大半が焼失してしまった。館山に住んでいた寺崎は、その報せを聞くと激怒し落胆したという。その後、許可を得て、法隆寺輪堂に壁画を制作したが、残念ながら現在は非公開である。



佐伯定胤→寺崎武男(館山市西ノ浜)

1942(S17).10.27 【法1】

拝啓冷気相増候処、弥々御清福奉賀候、尔来一向御無音欠馳走に御海容願上候、壁画模写中々はかどり不申候、中々の難事業也、五重塔は弥々修理工事に着手、目下瓦屋根造作中ニ有之申候、来春にも相成候、一度冬御光来被下度候、草々不一

▼ 法隆寺輪堂壁画を制作中の寺崎武男



法隆寺で私の画いている壁画御堂で、恩師佐伯定胤親下と写した記念の1枚です。太子は化身観音の仏力で大革命を起こされた其気分を表現している壁画殿の中央の作品です。



佐伯定胤→寺崎武男(館山市西ノ浜)

年不明 2月7日 【法2】

春寒拝啓御清祥奉賀候、而来一向御無音欠礼御海容願上候、御賢息方々皆々御健在御勉強奉祝候、道義廢頽の目下者手指集中ニ困難の至也、何卒ニも円海的人格御養生祈上候、壁画はまだ何共決定不仕其俟に候、中々の困難事慎重に考ふべき同題に候



## 法隆寺の壁画

寺崎 武男

### 保存修繕と芸術の価値

一の芸術品は、年代を経れば経る程、其のものの保存力は益々減じて来るのは、如何なるものに於ても同様である。併し芸術品は年代を経る事に依って其の芸術の価値は常に増して来るものである。全くつまらない土器の如きものも、千年以上も星霜を経れば、それが貴重なる物品に変わるものである。其芸術以外に或る一種の価値を生じて来る。即ち古芸術其のものは年代を経るに依って段々薄弱になって行くが、価値に於ては反対に常に増して行くのである。

併し乍ら此の芸術品が或る年代に於て修繕を加えられたとすれば、その修繕の程度に依って、其の芸術品の価値は却て下落するのである。即ち其の修繕が多ければ多い程其価値は下落する。之れは骨董趣味を持つもの及び美術史上の芸術品の価値と云う上に於て何人も認める事である。

今金堂の壁画に就て言ふと、或は修繕せられてあるかも知れないけれども、之れが修繕せられたと云ふ記録もなし、其他の実證も明かならず、壁画は其製作当時と同様のものと認められて大に賞讃されて居るのであるが、若し吾人の時代に於て之れに大修繕を加へたとか、或は大英断的の保存方法を施したとすれば、其芸術的並に歴史的の価値は決して減少しないでは居ないのである。

而かも其の保存法或は修繕の完全に行われたる場合に於ては、まだしも単に或る年代に於て保存修繕を加えられたと云う価値丈けしか減らないけれども、悪く保存修繕を加えらるる場合に於ては、其芸術上の価値に大なる変化を及ぼすものである。即ち此の芸術は非常に価値を減少し、如何に長く年代を保存せらるるとも、あまり実際の有難味の無いものとなって了うのである。

例えば此の壁画に硬化法を施したとして見れば、其の硬軟の物質上の変化の為に其壁面の現

わす感じも異って来るに違いないが、之れは芸術家の方面より言えば到底看過し得ざる重大事件である。パステルの如き軟かきデリケートな気持ちの絵も一度硬化されると油絵のような固い感じのものとなり、其の物質が現わす芸術は非常なる変化を来すものである。例えば紙に描かれた絵が鐵葉か瀬戸物の上に描かれたもののようになったり、或は綿の如きやわらかき気分の絵がセメントか壁の上に描かれたもののように硬いものになったりすることは免かれぬのである。

硬化法なるものは斯く迄壁画を変化させるものではないと云う事は無論の事であろうとは推察するが、芸術上の感覚に与える力と云うものは、微細なる変化も感じに於ては巨大なるものと化するが例だから、此際余程注意をしないと、此の壁画の芸術の根本の価値を損するような事を惹起しないかと思われる。

故に芸術品其のものの価値より言えば、悪しく保存たる位ならば、芸術品其のものの寿命に従って有りの儘に保存せらるる方が寧ろ正当の事と言はなければならぬ。

### 金堂壁画の耐久力

況して此の金堂の壁画が千年若しくはそれ以上に亘って保存せられたる今日に於て急に崩るる理由も見出し得られない、地震或は火災等の為に壁を直立させて居る物体が損する場合は格別、壁それ自身の保存力は尚十分である事は、第一壁が非常なる厚さを持って居ると云う事と、十分なる重みを有って居ると云う事と壁が直立の状態に存して居ると云う事と、及び構造が製作当時と殆んど何等の変化も無い完全なるものである事は、事実疑うべからざるものである事に依ても知ることができる。

殊に日本の壁の構造は他国殊に欧州に於ける

壁画の壁の造り方より以上に発達したものであって、第一壁の骨組が木を以て格子に組んであり、且つ其組み方は釘を用いずして藤蔓<sup>ふじづる</sup>を以て結ばれてあって、多少の動揺に対しては恰<sup>あた</sup>かも柳の風に逆わざるが為めに其の枝の完全を保たると同様な方法を用いてある。又壁土の中に混じて居る寸莎<sup>すさ</sup>の如きも空中に晒されないから、製作当時と殆んど異っては居らず、却って製作当時より鞏固<sup>きょうこ</sup>にあるかのように思われる。

よしやそれ程構造が完全に保たれないとしても、普通関西<sup>へん</sup>に行われる土塀<sup>へい</sup>を以て見ても、其保存が如何に完<sup>ま</sup>きかを容易<sup>たやす</sup>く認められるのである。昔より行われる土塀は単に普通の土を積み上げて塀に造ったものであつて、雨風に曝<sup>さら</sup>され通しであるが、而も能く数百年の寿命を保って、人為的破壊以外に天然の破損を以てくずれ終る事は殆んど無いのである。

尚お壁の如何に鞏固なるものであるかを知らんと欲せば、彼のぶっこわし屋の職人に聴くと能く判かる。壁をこわすと云う事は非常に困難である云う、殊に年代が古ければ古い程之を破壊させることは難しいそうである。

## 壁と保存の位置

或人は金堂の壁画を取って平面の上に置いたらよからう、そしたら破損は少なからうと言うが、之れは実に笑うに絶えたる愚<sup>ぐ</sup>な考<sup>かんがえ</sup>である。壁は直立面に於てこそ其れより生ずる重量に依って安定の位置を保つのであるが、之れに反し壁を平面に置く時は其重量が散漫し且つ軽くなる為めに保存に取っては甚だ悪い結果を来すのであるのみならず湿気及び乾燥の程度が大に強くなって非常に破損し易くなるのである。尚光線を受ける面積<sup>おおい</sup>も大に変わって来て保存に大影響を及ぼすと云うような訳で、此等の事を言いたすのは却って愚の至りであるかも知れない。

尚之を博物館の如き処に保存しようとする云うような考えもあるらしいが、之れは一層愚劣な考えであろう、今日日本に在るような博物館は、物質を保存する処に非ずして寧ろ破損せしめる処で

あるように思われることは、博物館員自身の能く認めて居る所である。

要するに総て物は自然の位置に置き自然の運命に任す方が無経験にして拙劣なる保存修繕の事業よりも遥に安全である事は、争う可<sup>べ</sup>からざる事実である。

然らば此の壁画を如何にすべきや、この問題に対しては他に方法はない。矢張り諸外国に於て其重なる芸術品を取扱うように、少なくとも現に保存されて来たと同様な一の壁を造り之れに完全なる模写を描いて保存する事が、此の壁画の破損に対する準備として最も正当なる仕方であることは言<sup>げん</sup>を俟<sup>ま</sup>たない。

## 保存に対する諸種の意見

尚此の保存に就ては、現在の壁画に幕を張れとか云う意見も可なり多いけれども、此の幕も湿気と乾燥に対して影響のあるようなものならば寧ろ無い方が安全であつて、直接に光線は当らず且つ変化する丈け変化したる現在の此の壁画に向つて、今更らそう云う準備が必要であるか否や大に疑問である。

又或人は此の壁画に塵埃<sup>じんあい</sup>が付き易いと言ってひどく心配するけれども、法隆寺附近は風が吹いても殆んど塵埃なぞの飛ぶ処ではなく、金堂内の仏像の如きも殆んどハタキではたかような事が無くとも塵埃は附かないのだから、普通の塵埃はあるとしても壁面を暗黒に為す程の塵埃はかからないと思はれる。殊に適度の塵埃は却って壁の保存を偶然に助けて居る事も事実であるから、右の如き心配は無用であらう。

只自分が比較的保存を助ける方法と信ずる処を言うならば、金堂の入口を南面のみ開放して他の三面は平常閉め切つて置くことである。此の事は光線の入る度<sup>ど</sup>を少なくするのみならず、堂内の空気を常に静止の状態に在らしめて大なる気流<sup>だい</sup>の変化を来さない<sup>きた</sup>ので、恰かも岩窟内或は墳墓<sup>あた</sup>の内に於いて壁画が比較的完全に保存せらるるの理と同様になる訳であつて、総べて寒温乾湿<sup>す</sup>の変化を急劇ならしめない為めに、少くとも壁の保存

ひえきに裨益する所があらうと思う。

尚壁画の参観を絶対に禁止しようとするような意見もあるやに聞くが、此の点に就ても壁画自身が既に一つの礼拝物であると同時に、日本に唯一の壁画であり、且つそれが日本の芸術の航路を現わす証拠となるべき貴重なるものである以上は、之を絶対に参観せしめないと言うことは、其の芸術の価値を大に減殺するものである。而かも之れを観せるに良き方法さえ採るならば、観せないよりも却って観せた方が総べてに於て益する事が多いのである。其方法としては、例えば参観人の通路となつて壁画の危険を慮るならば、壁画の下方に格子の如きものを設くるのも、壁画に触れしめない安全の方法として好き方法と思われる。

電燈の光りに依つて観せると言うことも単に暗き部分を懐中電燈で見る事を許す位の程度の事ならば、光線は不足であるとはいへ左程不便とも思われぬ。

忘れられたる一大事

最後に壁画の保存上最も重要な事であり乍ら一般から忘れられて居る一事がある。それは火災である。金堂無くして壁画は無い、一朝火災に逢えば、金堂と共に壁画は消滅して了うことは当然である。而かも法隆寺には何等の防火方法も設けられては無く、消防隊さえも寺には勿論法隆寺村に於ても存在して居ない状態に在る危険なる今日を思えば実に戦慄せざるを得ない。殊に法隆寺は砂地の上に水より縁遠き処に在って、如何なる危険が偶発しないとも限らない今日に於て、此の金堂を斯の如き状態に置くと云う事は殆んど驚かざるを得ない。

自分は一日も早く、日本芸術の祖先であり、世界に東洋芸術の最古の美を發揮して居る此の金堂及び法隆寺に対して、防火設備の完全ならん事を切に希望せざるを得ない。

『書道と画道』

- 大正8年6月1日発行 第4巻 第6号「法隆寺の壁画(4)」
- 大正8年7月1日発行 第4巻 第7号「法隆寺の壁画」
- 大正8年8月1日発行 第4巻 第8号「法隆寺の壁画」
- 大正8年9月1日発行 第4巻 第9号「法隆寺の壁画」

